

私たち湘南に住む人々と遙か太平洋の彼方のミクロネシアの島々とは、意外に身近な縁で結ばれていました。日系2世のアイザワススム(相澤進)さんは湘南育ちで、日本プロ野球2リーグ創生期に活躍し、ミクロネシアのトラック島に戻って大酋長となり、日本との友好にも尽くしました。この程、湘南育ちのノンフィクション・ライター近藤節夫氏によってアイザワススムさんの生涯を綴った『南太平洋の剛腕投手』(現代書館刊) が出版されたのを機会に、関係者の方々にお集まりいただいております。

司会：吉田克彦(江ノ電沿線新聞社)

★アイザワススムさんとの出会い

司会 ミクロネシアといますと、私は『冒険タン吉』や「酋長の娘」のイメージが浮かびます。第一次世界大戦後、日本は国連によって南洋諸島の委任統治を託され、南進の夢が膨らんだようですね。そのミクロネシア出身のアイザワススム(相澤進)さんは日本でプロ野球選手として活躍され、その後ミクロネシアに戻られて大酋長として活躍されました。皆さんは、アイザワススムさんどのように出会われたのですか。



近藤 節夫氏
【ノンフィクション・ライター、日本ペンクラブ会員】

近藤 私は長年、旧厚生省の遺骨収集事業に関わっていたのですが、1979年に当時の団長から「明後日トラック島へ飛んで、アイザワさんから遺骨収集許可をもらってきてくれないか」と頼まれたのです。その時に初めてアイザワススムさんとお会いしたのですが、ミクロネシアの僻地に日系人の酋長がいることに驚きました。また話をしてみると、湘南高校の先輩・後輩であることが分かり、すぐに打ち解けました。その後、手紙を2、3回やり取りしましたが、それっきりになってしまいました。

佐々木 私は「高橋ユニオンズ」(本拠地は川崎球場)というプロ野球チームでアイザワさんと一緒だったのですが、アイザワさんはピッチャー、私はセカンドだったので、一緒に練習した記憶はないのです。一緒に食事や飲みに行ったという記憶もありません。親しくなったのは彼がユニフォームを脱いだ後なのです。ただ不思議なのは、高橋ユニオンズが解散した時に解団記念写真を撮ったのですが、何故か、その写真にアイザワススムさんが写っていないのです。それがどうしてなのか、いまだに分かりません(笑)。ミクロネシアに戻られてから、来日する時にはたいてい電話がかかってきまして、一緒に食事をしながら、さまざまな話をしたものです。司会 当時の野球事情をお話していただけますか。

佐々木 プロ野球は最初セリーグが8チーム、パ・リーグが7チームでしたが、チーム数が奇数では試合日程上非効率なのでパではもう1チーム増やすことになり、各チームから選手を寄せ集めて高橋ユニオンズをつくったのです。他のチームにはスポンサーがついていましたが、高橋ユニオンズだけは高橋龍太郎さんの個人出資で運営している特殊なケースでした。貧乏球団でしたが、長閑なチームでしたよ。

★アイザワススムさんと湘南



相澤 光春氏
【大酋長の親戚、相澤土地㈱社長、藤沢商工会議所副会頭、国際ロータリー第2780地区直前ガバナー】

近藤 アイザワさんは長らく藤沢に住んでいましたし、トラック島にお帰りのなつてからも度々いらしてましたから、湘南には愛着があったのでしよう。藤沢中、中央映画劇場、竜宮城のような小田急片瀬江ノ島駅、江ノ電のことなどを好んで話されていました。昔、江ノ電にただ乗りをした、とか(笑)。私も戦時中と戦後の2度、鵜沼にいたことがあるのですから、湘南の話は盛り上がりました。

佐々木 戦時中、森喜朗元首相のお父上が中国からトラック島に転戦されて大隊長をしていた時に、ススムさんのお父上・庄太郎さんご一家と親しくなられたのだそうです。ラグビーをさす。ミクロネシアも毎年ブースを出して、クッキーなどの食料品、カレンダー、民芸品などを販売しています。売上金は寄付され、有効に使われています。またその延長線上で、ミクロネシアでは消防車が不足しているか、たいへん興味深いですが、藤沢で任期満了になった消防車を1台払い下げたという話も聞いたことがあります。

★日本とミクロネシアの交流

近藤 戦時中、森喜朗元首相のお父上が中国からトラック島に転戦されて大隊長をしていた時に、ススムさんのお父上・庄太郎さんご一家と親しくなられたのだそうです。ラグビーをさす。ミクロネシアも毎年ブースを出して、クッキーなどの食料品、カレンダー、民芸品などを販売しています。売上金は寄付され、有効に使われています。またその延長線上で、ミクロネシアでは消防車が不足しているか、たいへん興味深いですが、藤沢で任期満了になった消防車を1台払い下げたという話も聞いたことがあります。

近藤 たいへんドラマチックな展開ですよ。私はたまたまアイザワさんが亡くなられたことを知り、懐かしうちに、アイザワさんの人生に強く惹かれました。それをエッセイに書いてみたところ好評でしたので、出版するきっかけになったのです。

鼎談 ミクロネシアの大酋長と湘南 『南太平洋の剛腕投手』(近藤節夫著) 発刊に寄せて

佐々木 私は「高橋ユニオンズ」(本拠地は川崎球場)というプロ野球チームでアイザワさんと一緒だったのですが、アイザワさんはピッチャー、私はセカンドだったので、一緒に練習した記憶はないのです。一緒に食事や飲みに行ったという記憶もありません。親しくなったのは彼がユニフォームを脱いだ後なのです。ただ不思議なのは、高橋ユニオンズが解散した時に解団記念写真を撮ったのですが、何故か、その写真にアイザワススムさんが写っていないのです。それがどうしてなのか、いまだに分かりません(笑)。ミクロネシアに戻られてから、来日する時にはたいてい電話がかかってきまして、一緒に食事をしながら、さまざまな話をしたものです。司会 当時の野球事情をお話していただけますか。

佐々木 プロ野球は最初セリーグが8チーム、パ・リーグが7チームでしたが、チーム数が奇数では試合日程上非効率なのでパではもう1チーム増やすことになり、各チームから選手を寄せ集めて高橋ユニオンズをつくったのです。他のチームにはスポンサーがついていましたが、高橋ユニオンズだけは高橋龍太郎さんの個人出資で運営している特殊なケースでした。貧乏球団でしたが、長閑なチームでしたよ。



佐々木 信也氏
【湘南高校1年の時に夏の甲子園に初出場・初優勝、慶大主将として活躍の後プロ入り。全試合・全イニング出場の新入記録はプロ野球史に今も残る。スポーツキャスター】

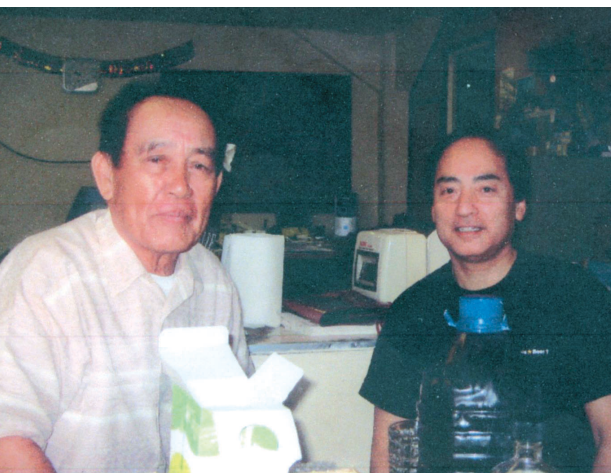
近藤 八月の中旬です。相澤 いえいえ、きっと喜んでいられることでしょう。司会 多くの方に『南太平洋の剛腕投手』を読んでいるか、たいへん興味深いですが、藤沢で任期満了になった消防車を1台払い下げたという話も聞いたことがあります。

★『南太平洋の剛腕投手』

佐々木 アイザワさんから最後に電話がかかってきた時は、元気な声で「おい、信」と表現しています。



小林泉著『南の島の日本人』より転載
始球式で最後の1球を投じるアイザワススム、右は佐々木氏。(2006年4月)



相澤進さん(左)と光春さん(右) 2000年頃

近藤節夫著
『南太平洋の剛腕投手』
10名様プレゼント!!

南太平洋の剛腕投手
近藤節夫
現代書館発行
販売価格 1,600円(税別)
四六版ソフトカバー 240頁

日本人を父に、南洋の酋長の娘を母として、2つの母国・旧トラック島と湘南地方を舞台に描く球投手ススム・アイザワのノン・フィクション。

この本(著者サイン入り)を10名様にプレゼントします。ご希望の方はハガキに氏名・〒住所・年齢・性別、地域の問題や感想、一番面白かった記事・つまらなかった記事を書き添えて、左記へご応募ください。〒251-0025 藤沢市鵜沼石上1-1-1 江ノ電第2ビル7階 江ノ電沿線新聞社「本プレゼント」係。締切は9月16日(消印有効)。応募多数の場合は抽選。当選者には9月末までに本をお届けします。